

平成18（2006）年度
経営評価及び意見について
（報告）

平成19年5月

国際児童文学館経営評価委員会

国際児童文学館経営評価委員会

| | |
|-----|--------|
| 委員長 | 須田 寛 |
| 委員 | 中村 桂子 |
| 同 | 原 昌 |
| 同 | 松園 萬亀雄 |

大阪府立国際児童文学館及び財団法人大阪国際児童文学館の平成18
(2006)年度施設及び事業の経営評価並びに主な意見は次のとおりです。

記

1. 総合評価 評価区分 B 概ね顧客満足度を満たしている。

2. 国際児童文学館経営評価委員会での主な意見

(1) 顧客満足度について

いろいろな指標に関する限りは良好な成績を収めており、来館者のアンケートからも顧客満足度は高い。

(2) 事業目標の設定の仕方及び評価について

- 財政的な制約のなか数少ないスタッフで、本の収集・整理・閲覧などの日常的業務のほかに、児童の健全育成にとって地道だが重要な仕事をしており、府民にとって重要な児童文学等児童文化の振興のための諸事業を行い、一定の効果をあげていることは評価する。
- 子どもと本というテーマはとても大事であるとの認識の下、様々な活動をよりよいものにしようという意欲が感じられる。
- 「フランダースの犬」は日本では人気のお話しであり、研究成果を展示にしたのはよい。島田陽子氏が講師をされたイベントは子どもが生き生きとしていたということであるので、このようなイベントは今後も実施すべきである。
- 学校や図書館など地域との連携が重要であり、今後も連携に資する事業を定例的に行っていくことが大切である。
- 朝の読書やブックスタートなどに関わるボランティアの養成、支援はとても重要であるので、今後とも積極的に行っていくことが望まれる。

(3) 評価に関連して提起された課題

- 当館のような施設は一般府民にその存在をひろく周知されること、いわば「存在感」が非常に重要であるため、多くの人々の関心を喚起するような、いわば話題性のある「目玉事業」が毎年1～2件は発想され展開することが望ましい。
- こども室・閲覧室の利用者は増加しているものの、必ずしも多いたとはいえない。当館立地の利便性がよくないだけに、積極的な広報活動が重要であり他機関との連携の下、一層の主体的な事業の展開を期待する。
- 国などの助成資金の活用や事業展開のための寄付などは、資金の獲得という面だけでなく、当館の認知度を高め、活動を広げるために重要である。今後も外部資金の獲得について、日本児童図書出版協会や児童文学等の研究者への寄贈依頼も含めて積極的努力が望まれる。
- 施設維持費の削減は、無駄を省くことと必要などころにはお金をかけることの

バランスが必要であり、削減が目的にならないようにすることが肝要である。

(4) まとめ

当館は全国的にも数少ない子どもの本の総合的センターであり、府域だけにとどまらず全国的な視野をもち、全国の色々な機関と連携して事業を展開することが望まれる。また、知名度をあげ利用者を増やすためにも広報活動、特に新聞社などの報道機関への積極的な情報提供を行うとともに広報戦略について新機軸を打ち出す可能性について考慮してもらいたい。

※丸野 豊子委員は、体調不良のため今回の評価は辞退